みんなで

大人になるってどんな感じ？
仕事の本音を聞いてみた

街を支える働く人たち

特別号
No. 40

進路や将来について悩むとき、
誰かの経験や言葉が背中を押してくれることがあります。
一人ひとりにそれぞれのストーリーがある。
そんな思いから、この一冊を作りました。

まだ、何者でもない君へ
四街道で働く、10人のストーリー

ダンスと留学に明け暮れた私が、警察官を選んだ理由

「ママ」で「国際派」自分らしく描く、警察官のキャリア

「警察官」と聞いて、どんな人をイメージしますか？
柔道や剣道の達人？少し怖い人？
四街道警察署・警務課の楡金さんは、そんな固定観念を軽やかに裏切ってくれます。大学生時代はダンスに熱中し、アメリカ留学も経験。現在は2児の母として、時短勤務や当直をこなしながら働く楡金さんに、警察官という仕事の「本当のところ」を伺いました。

WORK

楡金 侑希
Yuki Niragane

警察官 POLICE

所属：四街道警察署 警務課
出身地：東京都
誕生日：2月5日
好きな食べ物：チョコレート、寿司、コーヒー
推し：テイラー・スウィフト
特技：水泳、スノーボード

千葉県警察Instagram

1 「お巡りさん」だけじゃない警察組織の奥深さ

現在、楡金さんが所属するのは、車両や装備品を管理し署員を支える「警務課」です。「警察官というと交番のイメージが強いですが、実は刑事、交通、会計、生活安全など、まるで一つの会社のように多様な部署があります」。楡金さん自身も、これまでに交番、刑事課、空港署、県警本部など多彩な現場を経験。「仕事をしつつ、常に学びの機会があるのがこの組織の面白いところです」

2 きっかけはアメリカ留学「英語×警察」という選択肢

「英語を使って国際的な仕事がしたい」 大学時代、そう父に相談した際、「警察にも通訳や国際捜査という分野がある」と教えられたことが転機になりました。「当時はサークルでダンス漬けの日々。中学で剣道はやめていましたし、本当にどこにでもいる普通の大学生でした」

3 「向いていないかも」という不安を好奇心が超えていった

「実は私、自己主張が得意ではなくて、どちらかと言えば内気なタイプ。リーダーシップが必要そうな警察官は向いていないかも……という不安はありました。『柔道や剣道の経験がないとダメですか？』ともよく聞かれますが、そんなことはありません。私自身ブランクがありましたし、未経験者も多いです。大切なのは、今までの経験をどう活かすか。私は、『警察の世界を見てみたい』という好奇心が不安を上回りました。合わなければ別の道を探せばいい。そう割り切って、まずはやってみようと飛び込みました」

4 ママ警察官のリアル家庭と「当直」の両立

現在は2児の母として育児と仕事を両立。時短勤務制度を活用しながら、週に一度は「当直（宿泊勤務）」もこなします。「刑事課にいた頃は事件が起きれば帰れないこともありましたが、今の部署は比較的家庭との両立がしやすい環境です。夫や周囲の理解・協力があってこそですが、組織全体が、子育て中の職員や女性が働きやすいように変わってきていると感じます」

5 迷っている学生へ

進路に悩む学生へ、楡金さんは野村克也監督の名言を引用してエールを送ります。
「『習慣が変われば運命が変わる』。私も育児中に早起きの習慣で勉強し、昇任試験に合格して道が開けました。自信がなくても、まずはやってみる。合わなければ部署を変えることもできるし、警察には多様な道があります」
今の目標は、かつて目指した「国際捜査課」への配属。
「まだ夢の途中です」と笑う楡金さんの姿は、エネルギーに満ち溢れていました。

習慣が変われば運命が変わる　自信はあとからついてきます

救急救命士
PARAMEDIC

中井奈々美
Nanami Nakai

WORK

所属：四街道市消防本部
出身地：福岡県
誕生日：7月28日
好きな食べ物：たこ焼き、すき焼き、焼きそば、生姜焼き、など、『焼き』がつくもの
特技：側転
推し：クレヨンしんちゃんのしんのすけ
趣味：ガチャガチャ・UFOキャッチャー

四街道市消防本部Instagram

「かっこいい！」から始まった、救命士への道

将来を迷っていた私が、直感と仲間の支えで見つけた一生の仕事

ハキハキとした声で現場をリードする四街道市消防署の救急救命士、中井奈々美さん。高校時代は介護を学び、現在は消防士4年目。福岡から縁もゆかりもない千葉へ飛び込み、24時間体制で街の命を守る彼女に、仕事への想いを伺いました。

1 24時間 街の命を守るということ

中井さんの主戦場は救急車。「食事中も仮眠中も、要請があれば即出動。生活リズムを保つのは大変ですが、もう慣れました」現場では一瞬の判断が命を左右します。処置の技術はもちろんですが、それ以上に大切なのはコミュニケーション能力。隊員同士の連携、そして傷病者やご家族と瞬時に信頼を築くための『声』が、現場では大きな力になります。

2 直感で決めた「この人と働きたい！」

高校は介護科。「人を助けたい」という思いはあったものの、自分がどんな形で関わりたいのかまでは見えていなかった。進路に迷う中で訪れた、消防署見学。そこで目にした救急救命士の姿が、心に残った。「こんな仕事があるんだ」「一緒に働きたい」理屈ではなく、まっすぐな憧れだった。将来がはっきり決まっていなくてもいい。一度見ること、出会うことが、思いがけず自分の道を動かすこともある。

3 「一人じゃない」から限界を超えられた

専門学校時代の猛勉強を支えたのは、仲間の存在でした。
「勉強は大嫌いだった」という中井さんですが、教え合い、励まし合う日々を「同じ境遇だから分かり合えた“仲間だった」と振り返ります。一人では折れていた心も、志を共にする絆があったからこそ、救急救命士という夢のスタートラインに立つことができました。そんな「仲間」を大切にする姿勢は、今の職場でも変わりません。信頼し合えるチームだからこそ、夜中の指令で飛び起きたボサボサ姿を「ヤマンバが降りてきた！」と上司にからかわれる…なんて微笑ましい一幕も。そんな風に通じ合える仲間の存在が、過酷な現場に向かう彼女を支えています。

4 「自分を出せばいい」その一言で吹っ切れた

就職活動では、なかなか結果が出ず自信をなくしていた時期もありました。「周囲が決まっていく中、面接で落ち続けて不安でした」そんな時、友人がくれた「もっと自分を出せばいいじゃん」という言葉で目が覚めました。それまでは、合格しそうな自分を無理に作っていたのかもしれません。でも友人の言葉で吹っ切れて、四街道の面接では『もう、ありのままの自分を見てもらって、それでダメなら仕方ない！』と開き直れました。とにかく元気よく、自分らしく話すことが今の職場につながりました。あの時、飾らずに自分を信じて良かったです。

5 進路に悩む学生へ

「将来が決まらず不安な人もまずは周りの波に乗ってみるだけでいい。私も『かっこいい先輩』という些細な出会いから、一生の仕事が見つかりました」
今の目標は、どんな現場でも、一緒に働く仲間からも「あなたが必要だ」と思われる存在になること。
福岡から千葉へ。中井さんの挑戦は、四街道の街で今日も続いています。

周りと比べずにまずは視野を広げてみよう

迷った時間も、遠回りも、すべては自分の糧になる

頑張りすぎなくていい。必要なことは、社会が教えてくれるから

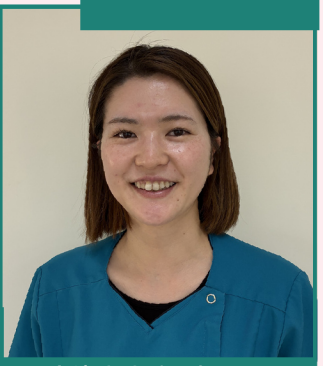
看護師として12年。下志津病院で、慢性期の患者さんと「より近くで」関わる日々を大切にしてきた小柳さん。かつて部活動で培った粘り強さが、今の看護の土台になっています。仕事ではプロの顔を見せる一方、プライベートでは筋トレや植物園巡りを楽しむ自然体な姿が印象的。「学生時代の悩みは特権」と笑って語る小柳さんの言葉は、進路に迷う心に優しく響きます。

WORK

小柳 千絵
Chie Koyanagi

看護師
NURSE

所属：下志津病院
出身地：茨城県
誕生日：11月28日
趣味：植物園巡り・美容
好きな食べ物：唐揚げ
特技：筋トレ
おすすめの店：イタリアンバル シエナ
好きなテレビ：オモウマい店



下志津病院看護部
Instagram

1 より近くで関わりたい 私がこの病院を選んだ理由

全国に病院を持つ国立病院機構（NHO）の中から、小柳さんが選んだのは下志津病院でした。「ドラマで見るような救命救急の現場とは少し違う、より患者さんと近い距離で関われる病院に行きたい」そう考えて、慢性期のケアに力を入れるこの場所を希望しました。

2 自分のやりたい「看護の形」に合った場所

下志津病院では、一人ひとりの状態に合わせた、日々の丁寧な関わりが求められます。自分のやりたい看護の形に合った場所を選んだことが、今の仕事のベース。

急性期のスピード感とは違う、じっくりと患者さんに向き合うスタイルが、12年というキャリアを支えています。

3 「毎日学校に行きたくなかった」私が部活で手に入れた強さ

小学校から高校まで続けたバレーボール。なかでも高校時代の練習の厳しさは別格で、「当時は毎日学校に行くのが嫌だった」と笑って振り返ります。
そこで学んだ「一つの目標に向かって諦めない姿勢」は、社会に出てからも大きな支えに。忙しい業務の中でも踏ん張れる粘り強さは、あの厳しい日々をくぐり抜けてきた経験から生まれています。

4 「悩めるのは学生の特権」いろんな世界を覗いてみて

進路に迷う学生に対し、「たくさん悩んでいい」と小柳さんは優しく背中を押します。
時間はたっぷりある学生時代。
もし少しでも迷いがあるなら、他の選択肢を見たり、職場体験に行ったりしてほしい。
そうやって自分の目で見て視野を広げた先にこそ、「やっぱりこれがいい」と納得できる自分だけの道が見つかるはずだから。

5 コミュニケーション力は、社会に出てから磨けばいい

学生のうちは、肩の力を抜いて、自分のペースで毎日を楽しむことが大切です。友達と遊んだり、アルバイトをしたり、興味のあることに挑戦する時間も、自分の力や未来の選択肢につながります。迷ったり悩んだりする時間も、決して無駄ではありません。社会に出ると思い通りにいかないことや辛いこともありますが、そうした経験が必ず自分を支える力になります。今しかできないことを思いっきり楽しんで、いろんな世界を覗いてみてください。

たくさん迷っていい　その先に自分が納得できる道があるから

理学療法士
PHYSICAL THERAPIST

三角 玄太
Gento Misumi

WORK

所属：下志津病院
出身地：埼玉県
誕生日：12月9日
趣味：野球・パワーリフティング
好きな飲み物：ワイン
推し：Official髭男dism・MISIA
おすすめの店：赤鬼
好きなアニメ：銀魂・鋼の錬金術師

下志津病院HP

理学療法士という選択 その先へ

「逆算」で切り拓いた、E判定からのキャリアと新たな学び

中学進学を目前に、親から提示された「理学療法士」という道。当時はトレーナーへの漠然とした憧れを抱く野球少年でしたが、待っていたのは模試での「E判定」という厳しい現実でした。「自分の人生に責任を持つ」。受験を機に芽生えたその自律心は、現在、国立病院機構 下志津病院での臨床、そして大学院での新たな学びへと繋がっています。専門枠を越え、着実に世界を広げ続ける三角さんの軌跡を辿ります。

1 野球少年が描いた「トレーナー」への夢

きっかけは小・中学生の頃。野球に打ち込んでいた三角さんが抱いた「将来はトレーナーのような仕事がしたい」という想いに対し、親が示したのは理学療法士という国家資格の道でした。そこから「逆算の進路選択」が始まります。理学療法士になるための大学、そしてそこに進むための高校選び。親からの問いかけを機に、自らの人生を論理的に組み立てる思考が、キャリアの原点となりました。

2 ターニングポイントはE判定からの大学受験

高校生活を野球に捧げてきた三角さんにとって、勉強はゼロからの挑戦でした。模試の結果はすべて「E判定」。志望校変更を推奨される厳しい現実からのスタートでした。野球での失敗とは違う、かつてない危機感。「ここで道が閉ざされたら、自分の人生がなくなっちゃう」その思いが、三角さんの中に「自分の人生に責任を持つ」という意識を芽生えさせました。苦手だった読書や学びに向き合う中で、気づけば「学ぶこと」が面白くなっていました。

3 スポーツから“人そのもの”へ

大学時代、当初の目標であったトレーナー活動を経験する中で、三角さんはある本質に気づきます。「アスリートもご年配の方も、結局は同じ人間の体。あらゆる角度で体を診られた方がいい」。特定の分野に特化せず、幅広く経験を積める総合病院を選びました。日々の臨床では、不調の原因を探り当てる「謎解き」のようなプロセスに没頭。仮説と検証を繰り返すその積み重ねが、理学療法士としての確かな土台を形作っていきました。

4 専門性の外へ 自分なりの「測り」を持つ

現場で経験を積む一方で、三角さんはさらなる視点の広がりを求め、この４月から働きながら大学院で「心身健康科学」を専攻します。。理学療法という枠の中に閉じず、異分野の人とも交わりながら、心と体の相関をより俯瞰して見たいと考えたからです。情報が溢れる時代だからこそ、提示された答えを鵜呑みにせず「自分の中に『測り（ものさし）』を持つこと」を大切にしています。
自ら納得できるまで構造を読み解く力は、より多角的に「人」を理解するための、着実なアップデートとなっています。

5 進路に悩む学生へ

やりたいことがないって、何でもできる、ってことじゃないですか。正解ルートを追うより、まずは動いてみることが大切です。小さく失敗してもいいし、アルバイトでも、人との出会いでも構いません。計算通りにいくことの方が少ないけれど、とりあえず飛び込んでみた先に、思わぬ副産物があったりします。経験を重ねる中で、自分が本当にやりたいことや大切にしたいことも少しずつ見えてきます。だから焦らず、まず一歩を踏み出すこと。その一歩一歩が、将来の自分を作る確かな力になります。

「やりたいことがない」というのは何にでもなれるということ

新卒入庁 × 転職入庁

二つのルートから見る、市役所の仕事

四街道市役所には、さまざまな経験を経て働いている職員がいます。
大学卒業後にそのまま入庁した永見さんと、民間企業を経験してから市役所に転職した櫻井さん。
歩んできた道のりは違っても、見つめる先には「四街道の未来」がありました。
それぞれの進路や仕事、そして「はたらく本音」について話を聞きました。

志望動機は「恩返し」と「生活のリアル」

永見　私は母校の千葉敬愛高校が四街道にあって、「ずっとお世話になったこの街に恩返ししたい」と思って市役所を志望しました。
でも、櫻井さんの志望動機はもっと生活に根ざしたものですよね。

櫻井　そうだね。私は二人目の子どもが生まれた時に、都内まで片道一時間半かけて通勤していたんだけど、育児との両立が本当に大変で。
正直に言えば、「家から近くて安定している仕事」に惹かれたのが転職の大きなきっかけだった。
でも、それだけじゃなくて、当時「パパママルーム」を利用して本当に助けられた経験があって、「今度は自分が支える側になりたい」と思ったのも事実なんだ。

永見　きっかけは人それぞれでいいんですよね。

櫻井　本当にそう。私は学生さんにも「志望動機なんて『家から近い』とかでもいいんだよ」と伝えたい。
大事なのは、入った場所で「やるべきことをしっかりやる」こと。
前職のIT企業では専門性が高く、大変なこともあったけれど、そこで自分なりに考えて動いてきたことは、今の部署で新しい仕組みを作る時にすごく活きている。
やってきたことは、ちゃんと今の自分に繋がっているんだよ。

仕事のやりがいと醍醐味

永見　櫻井さんは今、多文化共生の推進に取り組まれていますよね。
仕組みをゼロから作るのは、かなり大変だったんじゃないですか？

今を精一杯楽しむ
その積み重ねが
自分の未来を創る

新卒入庁
永見
Nagami

所属： 政策推進課（入庁５年目）
ダブルスクール経験後、新卒入庁、広報担当
出身地： 千葉県
誕生日：11月２日
好きな食べ物：そば
おすすめの店：ののや
推し：ハンギョドン
趣味：カメラ
特技：卓球

四街道市
Instagram

櫻井　うん。直面する課題は多かったけれど、その立ち上げの過程で、本当にすごい色んな経験をさせてもらいました。

櫻井　広報は、やったことが「目に見える」のがいいよね。

永見　そうなんです。
自分が撮った写真が表紙や特集記事に載った時、保護者の方から「ありがとう」って言われたり、「広報紙をもうちょっとちょうだい」って言われたりすることがあって。

櫻井　それは嬉しいね。

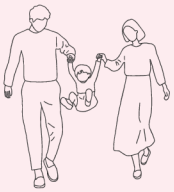
永見　はい。
取材で市内のイベントに赴き人の笑顔を撮っているとこういう仕事をしていてよかったなって思います。デスクワークだけじゃなくて、人の笑顔が増える仕事。
それが私のやりがいです。

櫻井　ただ、市役所には数年おきに部署が変わる人事異動があるよね。

永見　毎回転職するような感覚ですよね。どこの課に行ってもやっていけそうですか？

櫻井　業務内容は自分が覚えて頑張るしかないけど、あとは「人」との関わり次第だと思うよ。

永見　そうですね。どんな場所でも通用する自分になれるよう頑張る。
それが、この仕事の厳しさであり、面白さなのかもしれませんね。



進路に悩む学生へ

櫻井　仕事以外の時間も大事だよね。
私は最近ゴルフを始めたんだ。職場の上の方に誘ってもらって。
そういう仕事以外の繋がりも、意外と仕事のしやすさに繋がったりするし。

永見　私は仕事でカメラを使い始めたのがきっかけで、きれいな風景や美味しい食べ物を撮るのが趣味になりました。
あ、あと机に飾っているハンギョドン！
皆さんから頂くうちにどんどん増えて、今ではすっかり「熱烈なファン」だと思われています（笑）

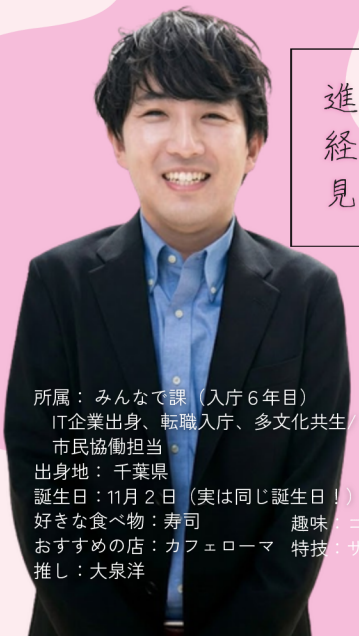
櫻井　好きなものがあるのはいいことだよね。

永見　私自身、学生時代はダブルスクールで学んでいた時期もあって、当時は大変でしたが、そこで一生懸命取り組んだ経験は今の仕事にも確実に繋がっています。
部活動でもアルバイトでも、何かに夢中になった経験は必ず役に立つと私は思います。
その中で自分の興味や得意なことが見えてくることもあると思うんです。

櫻井　進路は最初から一つに決めなくても大丈夫。
私のように社会人を経験してから市役所に入る人もいます。
いろいろな経験をしながら、自分に合う道を見つけていくことが大切だと思います。

永見　今いる場所で精一杯楽しむことが、きっと未来に繋がっていきますよね。

進路は一つじゃなくていい
経験しながら自分に合う道を
見つけよう



転職入庁
櫻井
Sakurai

所属：みんなで課（入庁６年目）
IT企業出身、転職入庁、多文化共生／
市民協働担当
出身地：千葉県
誕生日：11月２日（実は同じ誕生日！）
好きな食べ物：寿司　　趣味：ゴルフ
おすすめの店：カフェローマ　　特技：サッカー
推し：大泉洋

「学び方」を知ることが一生の武器になる

WORK

大野 直樹

Naoki Ono

教師
TEACHER

所属：千葉県立四街道高等学校
出身地：千葉県
誕生日：7月4日
趣味：食べ歩き、ドラマやアニメの一気見
特技：筋トレ
好きな食べ物：タン塩、甘くない卵焼き
おすすめの店：ちばから
惜し：Mr.Children

千葉県教育委員会
Instagram

「正解がわからない」からこそ、考え続ける

「高校野球の指導者になりたい」その思いから教職の道を選んだ大野さん。高校時代は野球に打ち込み、引退後に初めて自分の進路と向き合いました。野球への情熱は「学び」へと向かい、努力を重ねながら教員への道を切り拓きます。現在は四街道高校で担任、生徒指導、野球部顧問として多忙な日々を送りながら、生徒一人ひとりと向き合い続けています。自らの経験を糧に、「学び」の大切さを伝える大野さんに話を伺いました。

1 高校野球にはどこかやり切れなさが残った

高校時代は強豪校で野球に打ち込み、野球漬けの日々を過ごしていた大野さん。しかし、引退のときに残ったのは達成感よりも、「このまま終わりにはしたくない」という思いでした。最後まで打ち込んできたからこそ生まれた、どこか不完全燃焼のような感覚。その思いはやがて、高校野球に違う形で関わり続けたいという気持ちへと変わっていきます。グラウンドに、今度は指導者として戻る。その決意が、教職への道につながりました。

2 「無理だ」と言われても浪人という選択肢

教員を目指そうと担任の先生に相談した際、返ってきたのは「今の学力では志望校への合格は無理だ」という厳しい言葉でした。しかし、そこで諦めるのではなく「浪人してでも、教員になる」という道を選びます。今の実力と目標に距離があるなら、時間をかけて埋めればいい。大野さんにとって「浪人」は、決して挫折ではなく、自分の意志で未来を切り拓くための前向きな選択肢でした。

3 努力を結果につなげる「学び方」

念願の大学に入り、大野さんは大きな気づきを得ます。本を通じて知識がつながる面白さを知ったとき、高校時代をこう振り返りました。「当時は練習量こそ誰にも負けなかったけれど、正しい知識や方向性が欠けていた」と。がむしゃらな努力だけでは届かない現実。努力を確実に結果へつなげるためには、「学び方」そのものが大切なのだと気づきました。

Working!

4 みんなと仲良くしなくていい

大野さんは生徒に伝えます。「無理に、みんなと仲良くしなくていい」
誰とでもうまく関われる人はすごい。でも、それを全員が目指す必要はない。大切なのは、人との関わりを避けないこと。違う考えを持つ相手とも、必要な場面で協力できることです。学校にはさまざまな価値観の人がいます。そうした人との関わりの中で身につく関わる力は、社会に出てもきっと支えになる力です。

5 答えがないから学び続ける

学校現場には、正解がない問いばかりです。進路に悩む生徒には「選択肢を急いで狭めないで」と伝えています。やりたいことは、ある日突然見えてくるもの。迷うなら、可能性が広く残る道を選ぶのも一つの方法です。そんな大野さんが贈る言葉は、シンプルです。「勉強しよう」それは単に知識を増やすという意味ではありません。自分なりの「学び方」を見つけてほしいということです。自分の勝ち筋を知っている人は、どんな仕事でも努力の仕方が分かる。学び方を知る人は、未来を予測し、不安を自信に変えていける。今という時間を、自分の可能性を広げる「学び」に使ってほしいと語ります。

勉強しよう　それは自分だけの「学び方」を見つけること

テレビディレクター TV DIRECTOR

萩谷 智弘
Tomohiro Hagiya

WORK

所属：ケーブルネット296
出身地：埼玉県
誕生日：4月2日
趣味：フットサル、日本酒
好きな食べ物：唐揚げ
特技：即興食レポ
おすすめの店：和み食風流
推し：B'z

ケーブルネット296 採用担当
Instagram

預かった想いを正しく届ける その一心で現場に立つ

「迷ったときは、難しい道へ」 その選択が、自分を磨き上げる

テレビの世界。その舞台裏で、一人機材を担ぎ地域の声に耳を傾け続ける人がいます。番組制作に携わる萩谷さんは「自分は向いていない」と控えめに笑いますが、その裏には、預かった想いを一滴もこぼさず形にする、プロとしての愚直なまでの誠実さが隠されていました。カメラを回し、言葉を紡ぎ、映像を編む。地道で温かい「伝える仕事」の本音に迫ります。

1 現場に一人で立ち すべてを背負う責任感

萩谷さんの仕事は、朝の機材準備から始まります。ニュース取材であれば、一人で現場へ向かい、主催者への挨拶から撮影、インタビューまでを自らこなします。局に戻れば、その日のうちに原稿執筆、編集まで自ら行います。すべてを自ら担うのは、現場の空気感を自分の目と耳で捉え、責任を持って形にしたいというプロとしての強い自負があるからです。

2 預かった「想い」に 寄り添う誠実さ

単に情報を流すのではなく、「人の想いや地域の姿を正しく伝える」ことに、最も心を砕く萩谷さん。常に「相手の意図を汲み取れているか」「もっと良くできるのではないか」と自問自答を欠かさないのは、取材相手との信頼関係を何より大切にしているから。その地道な試行錯誤は、預かった想いを背負う、芯の強い情熱に支えられています。

3 「納得できるクオリティ」を追い求める理由

「自分が納得できるところまでいかないと、気が済まないんです」
その言葉の通り、萩谷さんが大切にされているのは、自分自身の内側にある「クオリティへの執着」です。その一切の妥協を許さない姿勢は、ギャラクシー賞をはじめとする数々の受賞という形でも証明されています。しかし、本人が見つめているのは評価そのものではなく、自らが納得できるものを作ること。その高い基準に向き合い続けるストイックな姿勢こそが、誠実さの何よりの証明といえるでしょう。

4 誰かの「次の行動」を生むきっかけでありたい

なぜ、そこまで妥協なく向き合うのか。その先には、揺るぎない願いがあります。「自分の作ったものが、それを見た誰かの心を動かし、次の行動を生むきっかけになってほしい」。映像は、届いて初めて完成するもの。自分が介在することで、誰かの想いが地域に溶け込み、そこからまた新しい何かが動き出す。その連鎖を信じているからこそ、納得がいくまで編集機のモニターと向き合い続けます。

5 迷ったときは「難しいこと」を選択する

新しい環境へ進む学生たちへ、自身の判断基準をこう語ります。「個人的には、迷ったときは一番難しいことを選択するようにしているんです。それが一番、自分を良くしてくれる気がするから」
今考えている夢がすべてではないし、何年後かには違う自分に出会っているかもしれない。だからこそ、今、自分を最も磨いてくれる、少しだけ厳しい道を選んでみる。焦って正解を探すのではなく、難しい方を選んだ自分を信じて、目の前の役割を全うする。その誠実な積み重ねの先に、あなただけの「道」は拓けていくはずです。

迷ったら、難しい道へ　その積み重ねがあなたの自信になる

「やりたいこと」がなくてもいい。まずは社会へ

「正解」なんて、後から作ればいい

高校時代、白球を追う傍らで描いていた「保育士」という夢。
けれど、家族への想いから選んだのは、社会へ真っ直ぐに飛び出す「高卒就職」でした。生活介護施設「はちみつ」の職員として働く現在に至るまでには、会社の倒産や理不尽な経験など、多くの葛藤があったといいます。「最初から正解を選ぼうとしなくていい」と語る堀さんの言葉には、遠回りをしたからこそ見つけられた、働くことの本質が詰まっています。

WORK

堀 柊人

Syuto Hori

所属：生活介護はちみつ
出身地：千葉県
誕生日：11月16日
趣味：野球、ショッピング
好きな食べ物：コーヒー　メロン味の食べ物
思い出の一曲：ケツメイシ「パラード」
★スタバの注文は、アイスのほうじ茶クラシックティーラテ（グランデ）ブラックティーに変更氷少なめ

福祉
WELFARE

社会福祉法人よつかいどう
福祉会Instagram

1 憧れの保育士を諦め、選んだ「高卒で働く」という道

本当は、保育士になりたかったという堀さん。しかし、ずっと野球を続けさせてくれた親には、金銭面でもすごく苦労をかけたといいます。「これ以上、負担をかけられない」という思いがあって、進学ではなく就職を選択。高3の夏に部活を引退し、まずは造船関係の工場に飛び込みました。

2 会社の倒産、そしてコロナ禍での「理不尽な経験」

最初に入った会社は人に恵まれていましたが、しばらくして倒産…その後、別の現場職に就きますが、そこは人間関係も仕事内容も自分には合わず、理不尽に怒鳴られるのが当たり前の環境でした。さらにコロナ禍での対応にも疑問を感じ、心身ともに疲れ果てていた時期を振り返ります。
「『何のために働いているんだろう』と、社会の厳しさに打ちのめされそうになっていました」

3 友達の紹介で出会った『福祉』という選択肢

転職も考えていた時、声をかけてくれたのが野球部時代の友人でした。彼が働いていたのが「生活介護はちみつ」です。代表の金室さんに会った際、若い人を応援してくれる考え方に惹かれ、まずはやってみようと決意。「挫折続きで腐っていた当時の僕ですが、あの時声をかけてくれた友達がいたからこそ、今の場所にたどり着くことができました」

4 知識ゼロからスタート 現場での変化が、今の自分の刺激

最初は「自閉症」という言葉すら知らない状態でしたが、現場で少しずつ経験を積み、ステップアップしてきました。できなかったことができるようになる。名前を覚えてもらえる。そんな日々の小さな変化が、今は何より嬉しいと語ります。「壁にぶつかった時に、それをどう壊していくか考えることが、今の僕にとってのいい刺激になっています。今はまだ明確なビジョンがすべて決まっているわけではありません。でも、この場所で感じるやりがいが、今の自分を支えてくれています」

5 一足先に知った、社会の面白さと人の温かさ

「やりたいことが見つからないまま進学するなら、先に社会に出る選択肢もあっていいと思う」
そう語る堀さんは、高卒で働くことを選んだからこそ見えた景色があるといいます。周りが大学生活を送る4年間、自分は現場で汗をかき、失敗し悩み、人に支えられてきた。その時間が今の自分の土台になっていると実感しています。最初から成功する人なんていない。遠回りに見える道も、振り返ればすべて意味がある。
「失敗を恐れずに、まずは挑戦してみてほしい。動いた分だけ、自分の世界は広がります」
社会は厳しいだけの場所ではなく、人の温かさや思いがけない出会いにあふれている場所でもある。堀さんの言葉には、遠回りをしたからこそ辿り着いた“働くことの本当の面白さ”が込められています。

思い切って挑戦してほしい　必死に動いた時間は絶対に無駄にならない

介護福祉士 CAREGIVER

杉山 薫
Kaoru Sugiyama

WORK

所属：アクティブのどか
出身地：千葉県
誕生日：7月14日
趣味：キャンプ、アウトドア
好きな飲み物：クラフトビール
特技：スノーボード、ドラム
おすすめの店：BeerO'clock
推し：BRAHMAN

のどかHP

遠回りだったかもしれない でもその全部が今につながる

SEから介護、そして農業へ。異色の経歴から生まれた、自分らしい働き方

「将来の正解を早く見つけなきゃ」と焦っていませんか？ 今回お話を伺った杉山さんは、大学を3年留年してスノーボードに明け暮れたり、IT業界から介護の世界へ転身したりと、一見「遠回り」に見える道を歩んできました。 しかし、そのすべての経験が、現在の多角的な福祉事業を支える力になっています。迷いながらも自分の道を作ってきた、杉山さんのキャリア論に迫ります。

1 雪山に明け暮れた学生時代

学生時代の杉山さんは、いわゆる「真面目な学生」ではありませんでした。スノーボードに夢中になり、冬になれば雪山に住み込んで働く生活を送り、大学は3年留年しています。当時はその道で生きていくことも本気で考えていました。その後、就職氷河期の中で医療系のシステム会社に縁があり、システムエンジニアとして約8年間働きました。一見バラバラに見える経験ですが、何かに本気で取り組んだことやITのスキルは、形を変えて今の仕事の土台になっています。

2 直感に従い、介護の世界へ

SEとして働く中で、杉山さんは「もっと人と直接関わる仕事がしたい」という強い思いを抱くようになります。その直感を大切にし、会社を辞めて職業訓練校に通い、介護福祉士の資格を取得するという大胆な一歩を踏み出しました。実家が介護事業を営んでいたという背景もありましたが、単に「継ぐ」のではなく、現場の苦労を知るために介護職からスタート。

そこから生活相談員、管理者と一歩ずつ経験を積み上げ、現在の経営に関わる立場へと歩んできました。

3 40歳での挑戦 必要なら「学び直す」

現場で経験を重ねる中で直面したのが、業界全体の課題である「人手不足」でした。特に看護師の配置が必要な状況を目の当たりにし、杉山さんは「だったら自分で資格を取ろう」と決意します。なんと40歳のときに看護学校へ通い始め、2年間学び続けて准看護師の資格を取得したのです。大人になってからでも、目的があればいつでも学び直せる。その柔軟で力強い姿勢は、組織を支える大きな武器となっています。

4 福祉を「運営する」という仕事

現在の杉山さんの役割は、現場でのケアに留まらず、事業全体を「運営する」ことです。高齢者のデイサービスに加え、障害のある方の就労支援、さらには農業（のどかファーム）など、複数の事業を動かしています。施設の中だけで完結するのではなく、農業を取り入れた「農福連携」によって、地域の中で誰もが役割を持てる仕事づくりを目指しています。経営者という立場になっても、「現場を離れすぎないこと」を大切に、自ら現場に入り続けています。

5 その遠回りが君の強みになる

「進路は『遠回り』でもいい」と杉山さんは語ります。最初から正解を選ぼうとしすぎず、まずは自分が興味を持ったことに挑戦してみてください。杉山さんが雪山で過ごした時間も、パソコンと格闘した日々も、そして現場で一歩ずつ積み上げてきた時間も、すべてが今の仕事で誰かを笑顔にするために繋がっています。あなたが今、迷ったり悩んだりしている経験も、将来思わぬ形で誰かの役に立つ「あなただけの強み」になるはずです。

遠回りは無駄じゃない　寄り道した分だけ君だけの道ができる

Find Your Own Path

自分の道を見つけよう

Step into your future from Yotsukaido

PARAMEDIC
救急救命士｜中井 奈々美
命の最前線に立つ

POLICE
警察官｜楡金 侑希
日常を守り抜く

PHYSICAL THERAPIST
理学療法士｜三角 玄太
一歩を支える

NURSE
看護師｜小柳 千絵
心に寄り添う

CROSS TALK
対談

CITY HALL
市役所｜櫻井 ・ 永見
街の明日をつくる

DIRECTOR
TVディレクター｜萩谷 智弘
今を切り取る

TEACHER
教師｜大野 直樹
未来を育てる

CAREGIVER
介護福祉士｜杉山 薫
日々に寄り添う

WELFARE
福祉｜堀 柊人
自分らしくを支える

みんなで　特別号　街を支える働く人たち

編集・発行：四街道市みんなで地域づくりセンター

こぼれ話 随時更新中！

HP　Instagram

所在地：四街道市大日396　四街道市文化センター１階
電話：043（304）7065　メール：info@minnade.org
協力：国立病院機構下志津病院 / 千葉県立四街道高校 / 四街道警察署 / 四街道市役所 / 四街道市消防本部 / ケーブルネット296 / 社会福祉法人よつかいどう福祉会 / アクティブのどか　（順不同）

発行日：2026.3.31　※所属や役職は取材時のものです

四街道で地域を支え、働く人たちがいます。その姿や言葉を若い世代に届けたいという想いから生まれた一冊です。ここに登場するのは、暮らしに欠かせない身近な現場で日々を支える10人。一人ひとりの経験や仕事への向き合い方をたどり、それぞれの言葉を一つのストーリーとして構成しました。
こうした出会いを通して、自分たちの暮らしが多くの人に支えられていることに気づき、地域との関わりを考えるきっかけになればと願っています。

四街道市 みんなで 地域づくり センター